

古墳

—発掘日誌—

昭和33年12月

児玉町庚申塚古墳発掘調査記録



埼玉県児玉町教育委員会

序

児玉町教育委員会教育長

海 北 条 司

近頃盛んに古墳等の埋蔵文化財の発掘が行われ研究されて居り誠に結構なことであるがややもすると珍らしい「財宝あさり」のように誤解されている向もあることは認認不充分と云わなければならぬ。古墳発掘の目的は必ずしも財宝にあるわけではない。然し遺物の多い程研究は甚で効果的である。

児玉町一円に亘り数百個の古墳が散在している。今回児玉町教育委員会に於て円墳として最大と思われる秋山庚申塚古墳を発掘した。勿論遺物遺蹟の物質的研究にあるのではなくそれ等に白められている古代の人間生活の全体を考究し人類が長い世代に亘って築いてきた文化財を世代に伝達しその若い個々の生命に体験させることによつて更に高い文化を築こうとする精神を培うのである。数回の盗掘にあつたとは云へ相当の出土品を得又構造の原型も概ねとどめたことは誠に幸であつた。

これ等の遺物や遺蹟は古代人の直接手にふれたものであり、遠く古代人の生活のあとを求め当時の生活技術の段階特に精神生活の一端を知り得ることができ、我々が想像していた以上の文化が当時栄え非常に広範囲に亘りその交流がなされていたことがうかがわれ驚きの他はなかつた。

こゝに小規模ではあるが発掘状況を集録していささか御参考にしたす次方であります。古墳復元については目下実施中であり近く完成の運びであるが、現代までの史実を明らかにし目で見る教材として一般に公開しようとするものである。本事業遂行に当り埼玉県文化財調査顧問委員小沢国平先生の終始御熱心なる御指導に對し衷心より敬意を表す次方である。

目 次

序	海 北 条 司	1
庚申塚古墳概要		3
発掘調査と日程		4
発掘調査日誌		5
遺 跡		9
遺 物		11
結 び		16
文 献		17
後 記		18
図 表		19
第1表	石材測定表	6
第2表	玉類一覧表	14
第1図	遺跡附近地形図	19
第2図	古墳実測図	20
第3図	石 室	21
第4図	石室復元想定断面図	24
第5図	秋山古墳群の一部	23
第6図	玄室内遺物	概
第7図	<div style="display: inline-block; vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</div> 鉄 鍔	25
第8図		25
第9図	刀 鍔	26
第10、11、12図	馬 具	27
第13図	鉄 器 片	29
第14図	装 身 具	31
写 真	(庚申塚古墳発掘写真集)	31

庚申塚古墳概要

児玉町から南方を東流する身馴川は西小平辺から漸く山岳地帯を
齧れて平坦地へと出る。この平坦地の北面には、生野山と浅見山と
の二丘陵が並び、南には標高531メートルを示す陸見山がありそ
の支丘の裾が連なり、此の向を流れる身馴川はこゝに扇状地を形成
して平坦地帯をつくっている。(第一図)

庚申塚古墳はこの扇状地の中で身馴川右岸500メートルの地高
標高115メートルの台地にあり、南に陸見の高峯を遙か北に木田
地帯をへだてて生野丘陵を望む好適の位置を占めている。

身馴川右岸には約240基の古墳が密集し、この中で更に70基の
秋山古墳群を形成し庚申塚古墳はこの古墳群の一冨墳である。高さ
5メートル、直径16メートルで墳頂には径1メートル、深さ55セ
ンチ程の凹所がある。元来こゝには庚申が祀られており、当地方の
習俗として永い間、庚申秩養のための設営によって窪められ、一部
石室の天井石が露出してゐる。

現に東南中腹に享保八年造立の庚申塔が一基残されてゐる。

庚申塚古墳の名もこれによつたものである。

墳形は己にその周囲が削り去られ、南側及東側は殊に甚しく、東
側にあつては盛土の層が現われている。頂上も前述の通りであるの
で原形を失つてゐる。(第二図)

当地域古墳が殆ど盗掘にかゝつてゐることは筆者等が昭和30年の児
玉全域の古墳調査によつて明かしたところであるが、本古墳も昭和
になつてから其の麓にあつたことが判明した。

このことについては遺物の項で述べる。

児玉地方に於ける古墳数は前述の調査では825基であつたが、
定形と思われるのは僅か23基に過ぎない。他は何れも雨罅、盗掘
其の他によつて破壊されてしまつたのである。

児玉町教育委員会は斯様な実情から今回庚申塚古墳一基を送んで
詳細な発掘調査を進め、児玉地方古墳の一考古資料として提供する

ことになったのである。

発掘調査と日程

古墳はかつてはわれらの祖先の墓であつた。たとえ、年代が経過していても矢張り祖先の霊の眠っている神聖の場所である。私達はこのために発掘調査の最初に修祓式を挙げた。8月16日午前9時30分に始め10時終了した。筑紫町長、海北教育長、文化財保護審議委員及高校教諭、生徒、地元関係教育委員の諸氏、小澤等数名でおごそかに行われた。

発掘に肉親した人々は次の通りである。

- 古墳位置 児玉町大字秋山宿田保 1769番地
- 期 日 昭和33年8月16日～26日
- 主 催 児玉町教育委員会
- 指 導 者
 - 埼玉県文化財専門調査委員 小 澤 國 平
 - 埼玉県社会教育課文化財係 柳 田 敏 司
 - 児玉町教育委員会教育長 海 北 条 司
 - 児玉町文化財保護審議員 大 澤 淳
 - “ 小 岩 井 友 次
 - “ 根 岸 善 治
 - “ 飯 島 治 平
 - “ 榎 井 真 章
 - 児玉高等学校教諭 柳 進
 - 児玉町大字秋山区長 飯 野 徳 太 郎
- 発掘担当者 小 沢 國 平
- 参 加 者 児玉町教育委員会、児玉高等学校生徒外、
児玉警察署、大字秋山地元関係者、児玉町伊藤
石材店、児玉町かしわ写真商会、

発掘調査日誌

8月16日 晴 10時～17.30分

墳頂には不規則の円形をしたくぼみがある。直径3メートル深さは50～60センチ程のもの。その底には天井石の一部が僅かに見えている。この穴は庚申祭の際に藁小屋様のものをたてるので子供達によって永年の向に掘られたので、この中で、火を燃したので土層中には木炭片などが随所に見出される。

天井石の一部と推定される石からやゝ西にふれて南に幅2メートルのトレンチを入れた。このトレンチの南端が、ほぼ羨道の入口に当ると考えた。ところが一方墳丘の南側の発掘によつて羨道の入口が発見されたので、このトレンチを途中で中止し羨道の方と一致するよう墳頂の発掘を更えた。そこで最初の天井石の一部と推定したのは、天井石ではなく、奥壁の頂上であることが判明した。

奥壁から南へ4メートルの地奥で墳丘表面下、66センチのところから形象埴輪破片が出土した。この辺には外に楯糸文や諸磯式の縄文式土器破片も出土した。然しこの土器片は明かに古墳築造の際地から土と共に運ばれたものである。羨道の上部の積土中から円筒埴輪の破片が数片出た。5～6センチ内外の径をもち、厚さ1～2センチ程であつた。

埴輪が この古墳のどの位置で、如何なる種類のものであつたか現在知ることを得ないが、東側採土の折、円筒埴輪が円く並列して発見されたと里人は語られた。

羨道に直刀の破片があつたが、これは玄室から、かつて運び出された一片であらう。

羨道の長軸はN25Eを示している。発掘は海北教育長外7名、現玉高校生徒30名、柳氏は高校生を指導して測量、撮影は黒沢利治氏がこれに当ることゝなつた。

8月17日 曇 8.30分～17.30分

玄室の土をさらつてみると、この中に天井石と、玄室の側壁に使

用された積石の崩れ落ちたのが7~8個露出してきた。何れも結晶片岩で落ち込んだ頃に重なり合っている。又、玄室と羨道との境に横に架けた緑泥片岩、長さ2.20メートル、幅4.5センチが現われた。これは羨道から玄室入口の上に横に置いたもので、これとならんで南に2個ならんであるが、何れも羨道の天井をなすものである。

この天井石の上には70センチの被土があり、この土と天井石との間は、厚さ10センチばかりの極めて良質の粘土で一面に被われている。これは天井石の位置を安定させるコンクリートの意と考え、羨道の上の被土を全部除去し、そこで羨道の入口の天井石も崩落ちていたことがわかった。

玄室の南面隅で天井の位置よりも上に径15センチ内外の小石が厚、40センチ程、列の粘土で固められていた。このことから推定すると、羨道、玄室の積石の外は先、粘土で固めその外側を小石—河原石—で固く被覆して、石室全体を堅固にしたのであろう。このことは、羨道入口の両側の発掘断面によつていよいよ判明した。羨道の奥で、東側の地点から損患破片出土、但しこれは勿論、当初の位置のものでない。

8月18日 快晴 9時~17時

玄室に落ち込んだ石をチェーン、ブロックで引揚げ作業をする。主として伊藤石工がこれに当り、他のものは落土の除去に力めた。これで玄室の東壁が、殆ど露出した。壁の下半に大体原形をみる事が出来たが上半は落崩れている。落ち込んだ石の測定は次の通りである。(第一表) 大体天井石と思われるものである。この外、両側

第一表 石材測定表

長	幅	厚	位置
2.10m	0.95	0.45	玄室
1.35	0.55	0.28	〃
0.93	0.45	0.15	〃
3.30	1.40	0.28	〃
1.70	1.00	0.17	羨道

壁の石もあつた。

東壁で北から1メートル、床上1.2メートル壁の積石に鉄片の塊が錆びついていた。

床上から離れているので、不思議と思つたが、天井石落下のときに飛び散つたのであろうと考えたものもある。

8月19日 晴 8.30分～17時

落込んだ天井石の中で最大のものをチェーンブロックで引揚げる。8時30分からはじめて13時に完了した。石の重量は石土の予測では5トン位あるという。巨大なこの天井石の下にも崩込んだ土砂。礫、岩石があるのでこの整理に相当の時間を費す。玄室の北から2メートルの地点で鉄片と鉄鍬2本が出土する。西壁、奥壁が現われた。

羨道の土砂を全部、除いたので西壁の積石の有様がよく判るようになった。玄室と同様上半は積石が落ちていた。尚、東壁は殆ど崩れてはいたが、入口の部分のみは積石が残っているのので、入口は1.20メートルの幅を知るを得た。

今日の作業は土砂除去に全力をそそいだので一同中々の骨折であった。筑紫町長夫妻の来訪があった。

8月20日 晴 8.30分～17時

また玄室には崩れ落ちの石があるので、除去につとめた。

床面と推定したところまで全面にわたって土砂を剝いた。最初に玄室の南西隅に馬具の破片を見出す。

吾々はこれから埋葬品があれば出土すると考えたので、緊張しながら念入り作業を進めていった。以前、この玄室の入口近くで金銅製の、杏葉数葉を探しあてたとのことをきいたが、今、床面の礫の乱れでそれを知ることが出来た。然し、その時には天井石が落下していたのでその下はそのまゝにしたとのことであつた。今日出土した馬具残片は盗掘の際より残された部面に相違ない。盗掘防止のため今夜より地元有志、児玉警察署の協力による夜警を始めることになった。床面はロームの上に20センチの厚さに径10～20センチ程の河原石を敷つめそれに砂利を交えて表面を平らにし、その上に径10センチ、厚1センチ程度の丸平石を敷並べたものであり丸平石は例によって結晶片岩の河原石である。本日の出土品は次の通りである。

(遺物の項参照)

雲珠、金環、管玉、勾玉、鉄鐸、鉄鍬、馬具残欠、鉄片、

県文化財保護係柳田政司氏、町長、助役、児玉町観光委員、児玉警

察者の方々が見えた。

8月21日 小雨後晴 10時～5時

床面の遺物は砂利が敷いてあるので発見に中々困難である。
西壁上半部の土石が崩落ちて、床面の大半を再び埋めてしまった。
この土揚げ作業に集中した。後床面の調査をする。

丸玉、小玉、数個、臼玉、勾玉、直刀、鉄鏃、の破片を発見する。

8月22日 晴 8.30分～17時

昨日に引つゞいて玄室内の土掃をする。秋平中学生大勢手伝のため案外片づいた。金環、勾玉、丸玉、小玉、多数、出土。

8月23日 8.30分～17.00分

床面の遺物としては昨日で大体完了したようである。東壁北から2メートルの地点に朱のついてある径2センチ程の河原石が7～8個並んであった。これで一応の調査が終了したので午後は附近の古墳のいくつかを調査した。

玄室の入口付近がかつて盗掘されたことは今回実際に発掘によって明らかとなり、更に玄室東半の壁に近い部分も難にあっていることが更にわかった。

遺 跡

石室(第三圖)石室の構造のうちではほぼ原形であると思われるものは玄室の奥壁である。この奥壁に横3メートル、高さ2.3メートル、厚さ9センチばかりの片岩の一枚石がたてゝある。天井となる部分は1.4メートルの幅となつてゐる。即ち、底が広く天井は狭くなる。玄室の長軸は5.10メートルで、床面では中央の部分が張り出している。そのため、床面の平面は恰も三味線胴の様な形をとる。東壁、西壁共、片岩の割石で幅1メートル、厚さ50~60センチ内外のものが使用されて居り、その間は河原石をもつて積み、何れも粘土で固めてある。石積の表面には少しの凹凸もなく、美しい平面をもつて積んである。然し上半は西壁共崩れ落ちてその原形は知り得ないが、恐らく下半部と同様であつたであらう。

床面は奥に行くに従つて低くなつてゐる。

玄室の入口から奥壁までのその差は30センチである。床面は前述の通りローム層(莖盤)の上に15センチ内外の河原石を敷並べその上に砂利をしき表面には九平石が美しく並べてあつた。

天井は最大の天井石が南半に置かれ、北半には二つの片岩が用いられてゐたことは落込んだ位置から推定することが出来る。

石室は所謂、両袖型で入口の幅は1.30メートルで、入口の上には径45センチ、長さ2.20メートルの片岩が横にかけてあり、その下にも又、一基重ねて横に渡した片岩がある。入口の西側に片寄つて、径45センチ、長さ70センチの片岩が斜に置かれてゐた。この長さは入口の高さと一致するので、もと入口にたてゝあつたものとも思われるが、不明である。

羨道の入口は横1.30メートル、高さ1.20メートルで羨道の中には天井石の一つは平石が落込んでゐた。西壁下半には石積が見られるが東壁には僅かに南端に一部、残されてゐた。これによると、羨道の入口は現位置よりも南にあつたかと思われる。

石室は以上のように割石と河原石とをもつて積まれたが、その外

面は厚く、良質の粘土で固め更にその粘土の外側を径15~20センチ内外の河原石・角岩、片岩、硬砂岩等——を1.50メートル程の厚さで被せて石積を全面にしたことは、渡道の入口の断面などによって明にされた。(第四図)

葺石は墳丘表面に可成り多数みられたが、東半部には殆んど無く西半に多い。これは墳丘頂上の登り口が東にあり、かつは庚申祭の度毎に取去られたものと思われる。墳丘の東部の崖面には大体一列に河原石が地表近くに墳丘の外形にそって並べてある。これによると葺石は墳丘の全面にあったと思われる。

遺物

㊤ 鉄 鏃 (オ七 四 1~17. オ八 四 18~34)

鉄鏃は総數で34本出土している。この中には、2片を合せて1本の完形となるものもあろうが一応、別のものとして述べる。

全部が何れも尖根式で片刃箭式、のみ箭式、陽扶柳葉式の三種がある。片刃箭式の完形は7本(オ七 四 1, 2, 3, 4, 5, 6, 13.)で、今、4についてみるに、全長、17.3センチ、鏃身の長さは11.8センチ幅、8ミリで図にて知らるゝ如く片刃となつてゐる。莖の長さは5.5センチ莖被は5.8センチ程で、莖の部分には糸で巻いたあとがみえてゐる。又、一般にこの部分は赤錆が強いのでそれとすぐ知られる。

莖には縦方向にせんいの形が見えるが、竹であるか木であるかは判明しない。のみ箭式(オ八 四 27, 28, 31~35)であるが、内、完形のものゝは31, 32. の二本である。31は全長、17.4センチ、鏃身の長さ、11センチ、幅、8ミリで造りは片丸造りとなつてゐる。莖の長さ6.4センチ、莖被は8センチを示してゐる。

同じくのみ箭式でも鏃身の幅の広いもの(オ八 四 27, 28)は造りが両丸造りとなつてゐる。

28は鏃身8.8センチ、幅、1.5センチ、で片丸造のものゝ比べて着しく大きい。莖の一部が欠けていて原形不明であるが、莖、3.5センチ、莖被2.8センチとなつてゐる。

陽扶柳葉式は2本出土したが何れも鏃身の尖端を欠いてゐるが29によつて推定すれば鏃身の長さ12センチはあつたであらう。

このものゝも両丸造りとなつてゐる。莖の長さ3.5センチ、莖被は8センチ程である。

尖根式は己に中期の頃から現われるが後期には非常に多く使用されたということである。

㊤ 大 刀 (オ九 四 36, 37)

大刀と小刀、即ちこゝにいう刀子とは何をもつて區別するか、長も大刀の短いものと刀子の長いものと比較するとほぼ同長にまで

接近して迷うことになる。筆者は30センチ以下のものを刀子という(註2)説に従って置く。

36は大刀の破片で、現在長、15.5センチある。平造、片刃で平棟の古墳出土品として普通のものである。羨道の床土から発見されたので多分、原位置のものではないと思われる。

37は玄室の奥壁の前、中央から南北の方向に置かれてあつた。現在身の長さ27センチで鋒先を失う。身巾3センチ、厚8ミリある。莖は10センチこゝに鉋がついてあり、鉋は上直、下円のだえん形をしている。莖には2ヶの大小の孔をもつ、柄間の拵は明でないが木片が残されている。こゝに長径4センチ、短径2.3センチ、下尖のだえん形で幅1.5センチの金銅の金具があつた(第九四三七c)3つの玉鉄が打こまれている。

或は鐙に当るものであろうかと思つたが、原位置から推定して柄頭とする。柄頭に鉄を打つたものも、このものとは勿論異なるが出土例はある(註2)。

羨道から玄室にはいつたところに才十二四九7の金銅製品が発見された。馬具類の出土した、玄室南面隅に並いので或は馬具の一部かと思われ九が、大刀の鍔(せめ)ともみられよう。

㊦ 鐙(才九四三9)

玄室内で才六四19の位置に水平にあつた。鉄製、梯形の透しある所謂八窓で、長径12.5センチ、短径6センチの倒卵形である。

㊧ 馬具(第十、十一、十二四)

a. 雲珠(第十四41)

雲珠は尻繫の上につける。かざりである。雲珠41は金銅製で、直径10センチ、高さ(鉄)4センチの可成り大きいもので八葉二重の座金に宝珠形の飾立がしてある。鉄の底部には三條の輪がさざまれ、鉄留は現在2つあるが、8あつたことが推定出来る。鉄留は円頭で只一ヶの鉄であるから、同じ位置即ち、才六四23出土の才十四41のc及dはこの附屬であろう。第十一四85も雲珠で直径6センチ、貝類〜恐らく「いもがい」などの殻を横断し、その面に現われる

貝殻の淵底の有様を飾りとしたのであろうか。圖中、1は鉄器で2は見殻で、aはその表面から見、bは側面を現わす。栗下では珍しい雲珠の一つと告えよう。下野國、下都賀郡、婆村下古山発見（註3）には次のような記事がある。

「雲珠附屬品としては屢々貝製品が発見される。……螺頂部を以て示すのが即ち貝の部分である。いもがい科の貝の螺頂部を切取って外縁に銅環をはめ、中央に銅又は金銅の座及び突起を逆る。

これと全く同構のものと思われる。

第十圖40. は4脚をもつ雲珠で、鉢の直形4センチ、深さ1センチの金銅製、4脚中2脚を失っているが、各脚に3つの銹あるところからみると、42. はこの雲珠に關係あるように思われる。57も、この種、雲珠の残片であろう。

α. 同圖56は径5センチ、金銅製の極めてうすい板で表面に円形の毛彫がみえ、中央に小孔があるので一種の座と考えられる。

β. 43~52. 53~55 は雲珠又は辻金具の脚の一部であり、58~69は馬具の或る部分の銹留であろう。一括して他の馬具と共に出土した。

γ. 鍍金具（第十一圖70~76） 幅8ミリの超長い金銅に鉄がうちつけてある。中は鉄となつている。鉄地金銅張銹留金具（註4）はこれであろう。鞍橋（くらぼね）の鍍に並び打つたらしい。

δ. 引手（第十三圖95）鉄製、長さ7センチ、これは手綱に連なる部分である。

δ. 鉄器類.

用途の明らかでない鉄器にオ十一圖77~84の如きものがある。長さ4センチ内外で丸棒の両端に球状の頭がついている。その両端の下に花のような座？がある。馬具の釘留でもあろうか。尚、オ十一圖86~93のような半環も発見された。前者と共に鉄製。

鉄片としてオ十三圖110~114の如きがある。

この鉄片はこの外に25片あるが何れも腐蝕が甚しく原形を知ることが出来ない。99. 104. 114. は釘であろうか。

㊦ 装身具（第十四回）

a. 金属環 3対の耳環がある。115、116の1対は、輪の径3センチ、鉄製で赤く錆びている。117、118は輪の径2.8センチ、全面銀青が強い。119、120の1対も同様、緑青が強い金環である。1人に2塚づゝ用いたので3体の埋葬者は考えられる。

b. 勾玉（第十四回）勾玉は「ひすい」と「めのう」との二種で122は「ひすい」で玄室、第六回 22 から見出した。孔はテーパは無く両面同径にあけており、オリーブがかった美しいものである。長さ2.5センチ、幅1センチを示す。121、123、124、125は共に「めのう」で何れもテーパをもつて穿孔されている。123は長さ3センチ、幅1センチで、コ字型を示している。121、125は孔が頭から離れ、形もあまりよくない。殊に後者には表面に磨出しを稜が残っている。しかし色沢は半透明、うす鉛色で美しい。

c. 管玉（第十四回 127）

長さ1.7センチ、径6ミリの碧玉で孔はテーパを持ちやや斜に穿孔されている。うす青の美しい色をしている。

d. 丸玉類（第十四回）

玉類として丸玉（128～134）白玉（135～138）小玉（139～147）を図示した。丸玉は径1センチ内外で藍色、白玉は径1センチ、高さ6ミリ内外でその中で135は濁白色の滑石製、小玉（139～147）は径4ミリ内外の藍、緑、黄の色をもつ。以上の玉類は何れもガラス製で、孔はテーパを持たない。次に表示する。

第二表 玉類一覧表

種 \ 色	藍色	緑色	白色	黄色	
丸玉	12	0			
白玉	7		1		
小玉	65	17		17	
計					119

（数字は出土数を示す。）

丸玉の内に扁平で、所謂、平玉と称すべきものもあるが、径1センチ内外のものは丸玉中に数えて、特に区別をしなかった。

D. その他、埴輪で円筒埴輪片が多数、羨道の上部の積土の中から出たが、これは勿論、原位置ではない。里人の話では、東側の現在、採土したところから円筒埴輪が4~5基、列をなして発見されたという。形象埴輪片も若干あった。

土師器の坏破片及、底と頸部の高坏の坏部破片が、羨道の上積土から各一ヶ、発見された。土師坏破片は現在高4センチ、口縁はゆるく円を描いてたち、底と口縁部の境は内側に於てゆるい稜をつくっている。厚さ5ミリ程で赤褐色、胎土、焼成共に良い。

結 び

庚申塚古墳は秋山古墳群の中でも一番、大きい古墳である。高さ5メートル程あり、他のものは大概、2メートル内外の小古墳である。古墳群をなす古墳の位置をみると、庚申塚古墳がこれ亦、殊れた位置にあり、尚、注意すべきことは、庚申塚古墳を中心とし半径50メートルのところには八つの小古墳が円列をなし、一見、陪塚の感があることである。(第五四)

この古墳築造の年代はどうであろうか。その石室についてみると、前述の通り横穴式石室は自然石積の両袖型である。横穴式石室の中で両袖型は、袖無型よりも年代は新しいという。即ち袖無型→片袖型→両袖型に移った。そうして、自然石積両袖型は7世紀頃と比定している。(註5)。然し、普通に云う両袖式プランのものが正常の型式のもので、袖無型とか片袖型とかいう正常の型式から違いものは型式学的には相対年代の降るものであるとの論もある(註6)

遺物についてみるに、着しい特徴は馬具類の多く埋葬されている事実で、今回の調査ではその実数は決して多いとはいわれないが、かつてはこゝから乗鞍、杏葉鞍、その他が発見され、然かもそれらは豪華な金銅製であつた。馬具の副葬は己に中期古墳にも認められてはいるが、本古墳の場合、他の副葬品などと照合せて後期のものとしなければならぬであろう。例えば、玉類にみても、古くは藍色を主調としたものか、本古墳出土のものの中には、緑、黄、淡青などの様々の色をもつものがあり、又、勾玉にあつても第十四図/23の如くコの字型のもの出土は明に後期古墳の一特徴とするに足る。

一片の土師杯ではあるが、このものの時代も後期と考えられるので先づ庚申塚古墳築造年代は七世紀に比定してよからうと思う。

本古墳に埋葬された遺体は3体知り得ることは前述の通りであるが家塚墳である以上この中主人公は何れに比定すべきであろうか。玄室内方六四ノ7の位置を想像してみれば、当時の身長を平均1.60メートル

程度という(註6) ことに従えば、それに大体一致する。頸部を北に葬ったことになり、頸部には勾玉4個がありその一つは「ひすい」であり、出土勾玉中の玉座を占めるものである。耳環の位置もほぼ原位置に近いものであろう。4.21の長骨は脚部のもものと推定する。馬具が、この遺体の南直ぐに副葬されているのもこの主人公と肉親あるのであろう。

華麗な馬具の持主であつた被埋葬者は、また巨大な石材をもつてこの古墳を築造せしめたこの地域の権力者であり、聚落の開拓者でもあつたことであらう。

文 献

1. 埼玉県教育委員会「古墳調査報告」オ1編
2. 後藤守一「考古学講座原史時代の武器と武装」
3. 八幡一郎「日本考古図録大成馬具」
4. 千葉県教育委員会「金鈴塚古墳」
5. 尾崎喜左雄「古墳のはなし」
6. 後藤守一「古墳とその時代」

後 記

今回の発掘調査に当って児玉町長と児玉町教育委員会は海北教育長をはじめとし各委員、その統率に力を致されたことは最初に銘記せねばならない。

又児玉町文化財保護審議員諸氏のなみなみならぬ発掘の努力、児玉高校及地元関係者、国学院大横川氏にも改めて衷心から感謝を捧げる次第であります。

(執筆 小 澤 國 平)

— 文化財シリーズオ7号スライド —

小(高学年)中高等学校社会科教材
成人向社会教育教材



児玉町秋山庚申塚古墳発掘記録!!

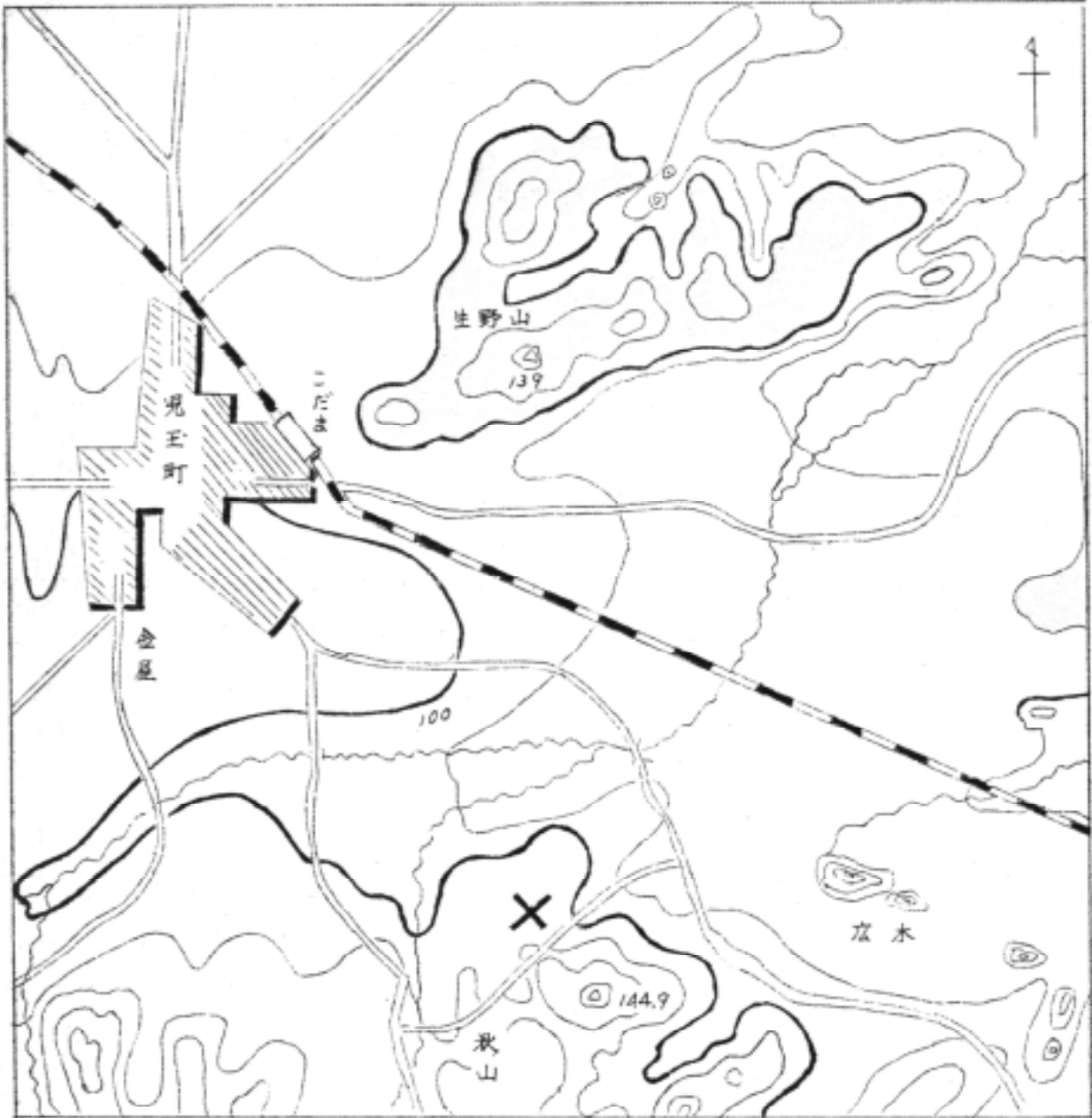
古墳のなぞをとく? 神秘的な古墳解剖!!

製 作 児玉町教育委員会

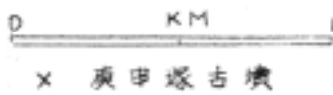
監 修 小 澤 國 平

(随時希望貸出無料)

至本庄

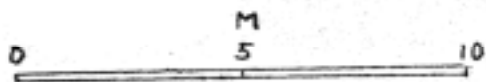
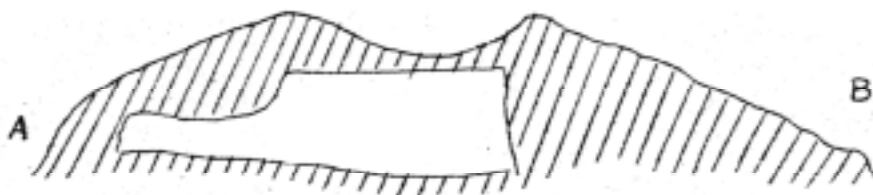
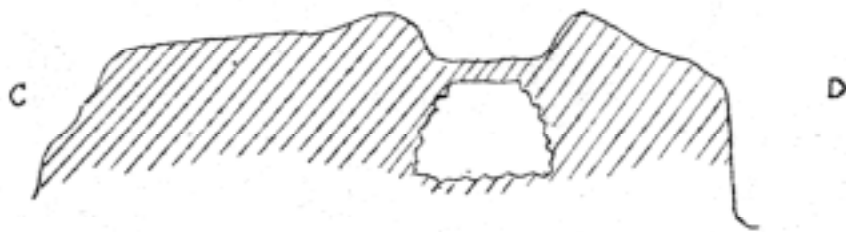
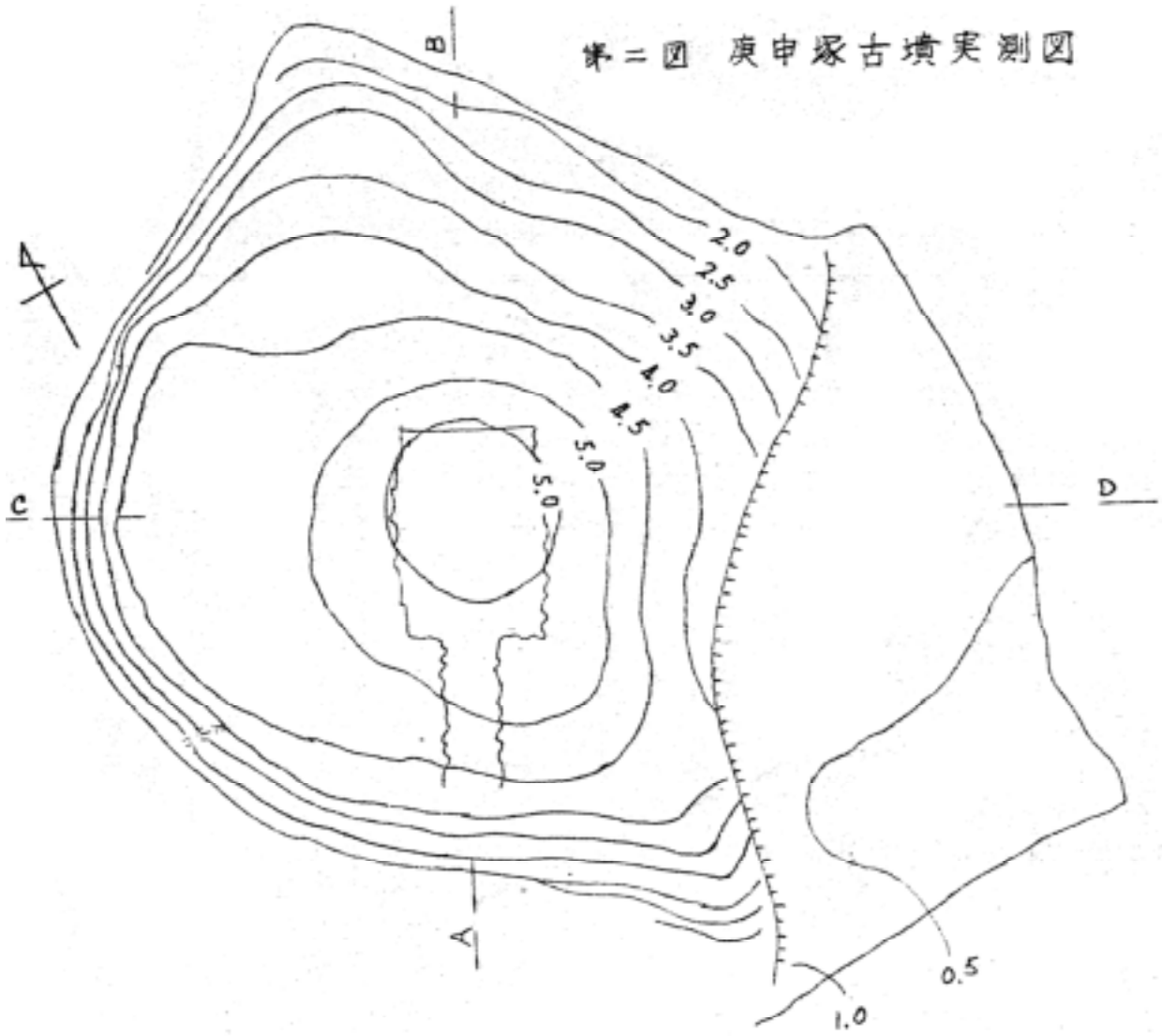


至野居

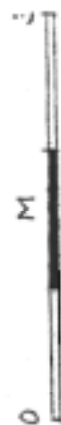
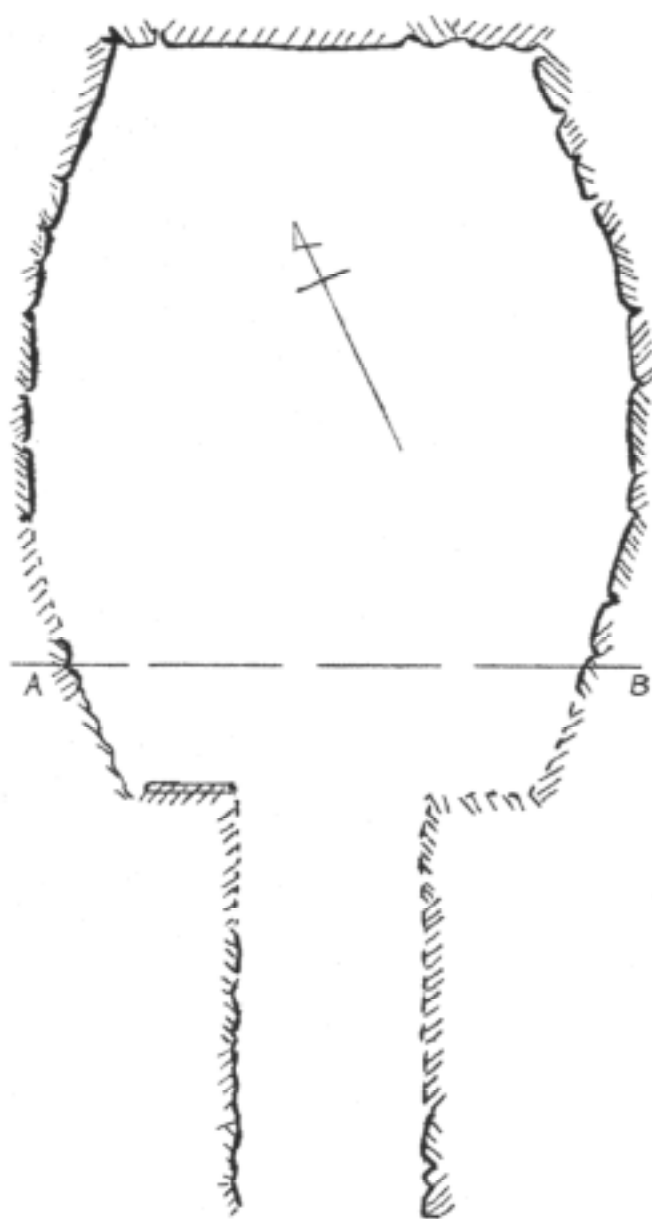
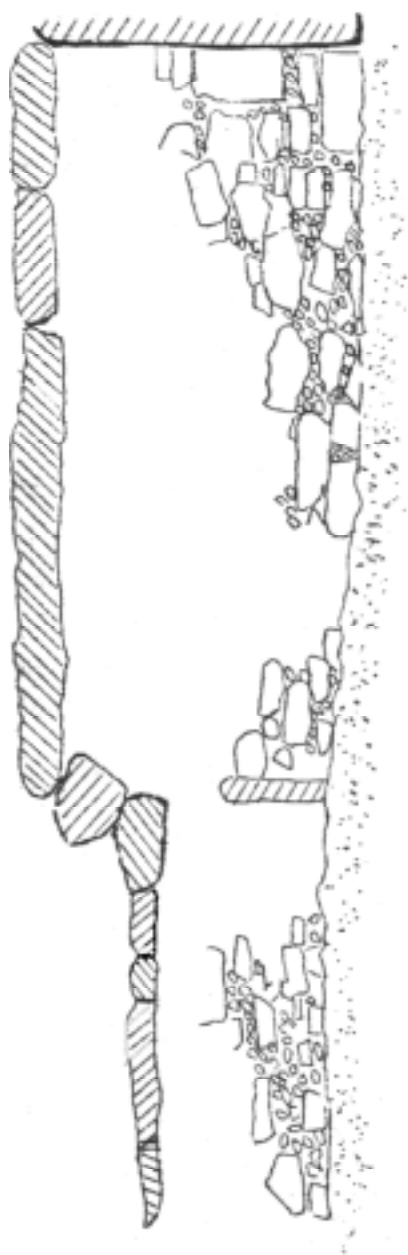
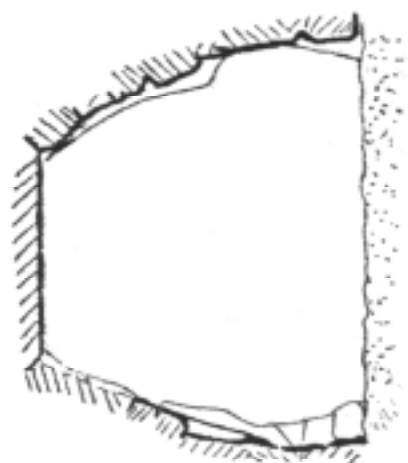


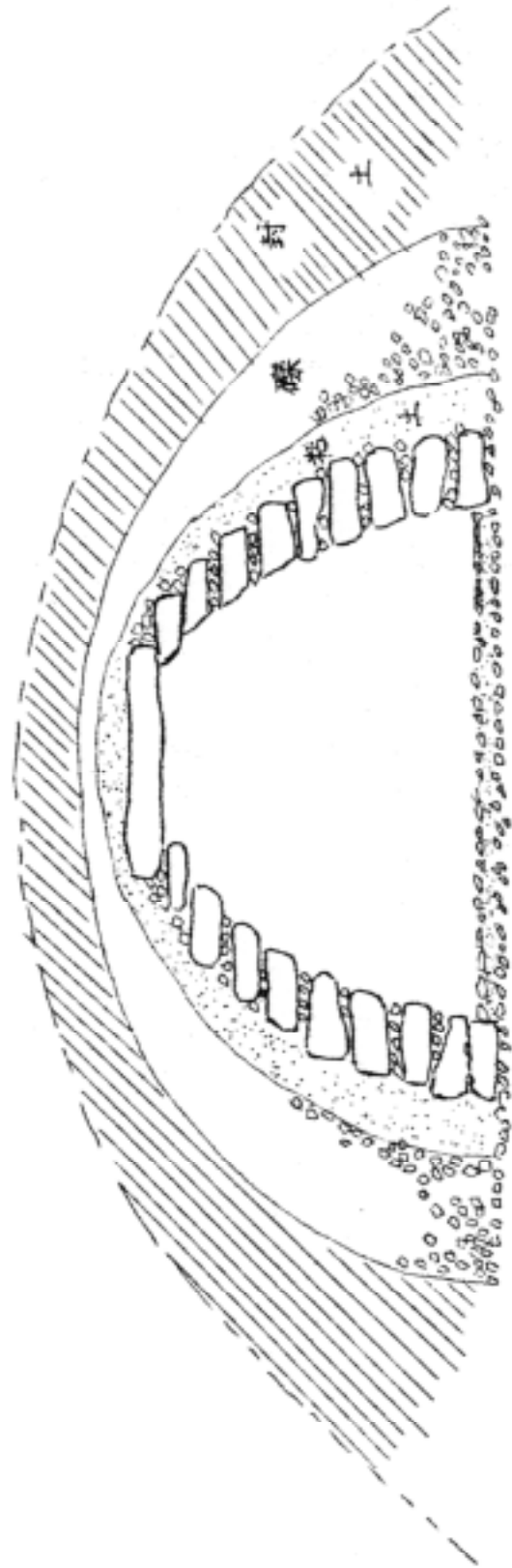
第一圖 遺跡附近地形圖

第二圖 庚申塚古墳実測図



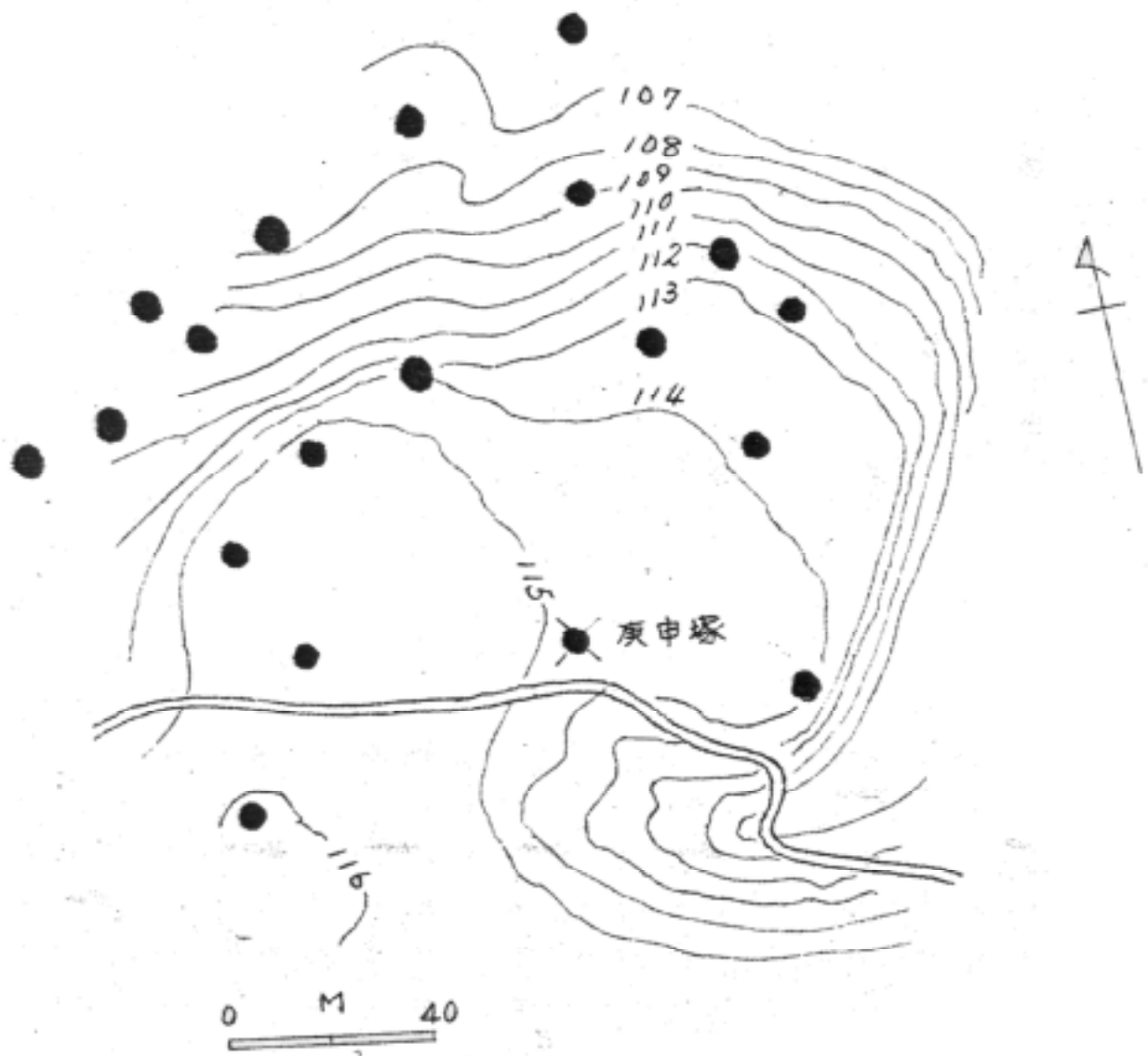
第三圖 石 室



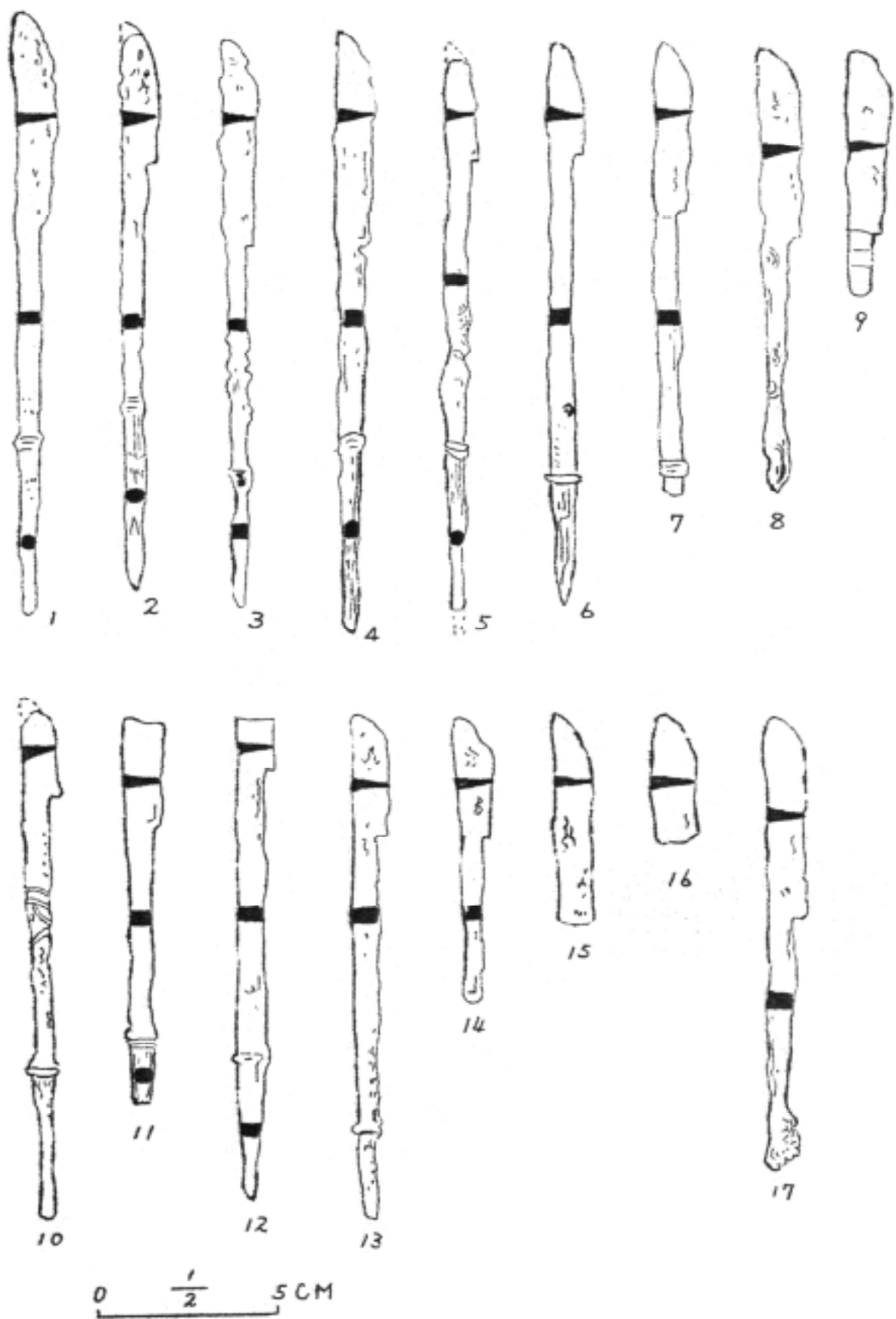


第四图 石室 A-B 复原想定断面图

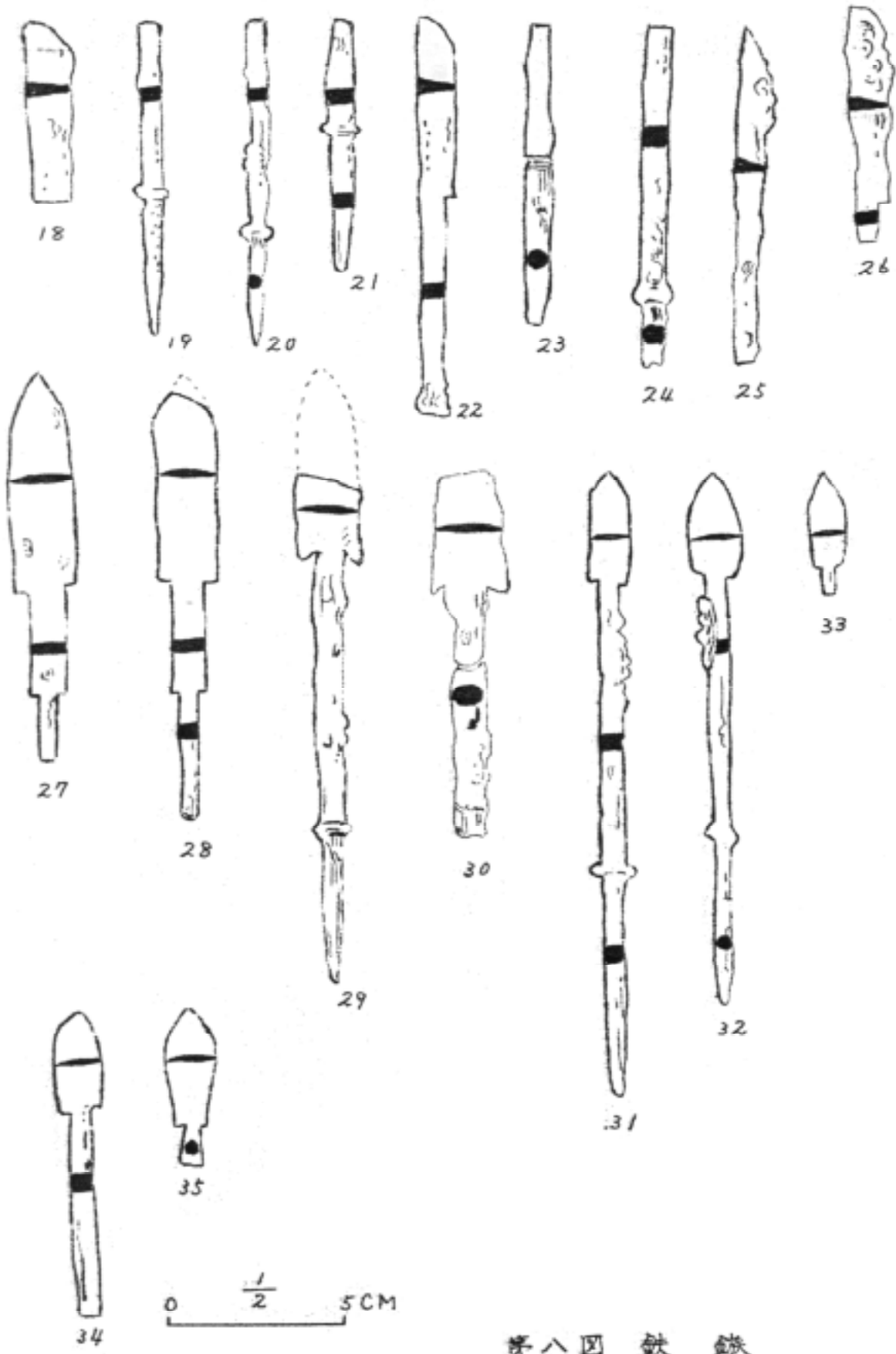
0 M 2



第五圖 秋山古墳群の一部



圖七 鐵 劍



第八圖 鉄 鍔



36
大刀



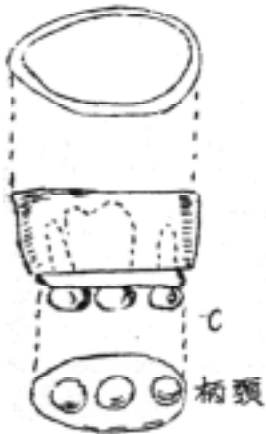
a
大刀



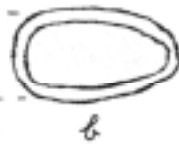
刀子
38



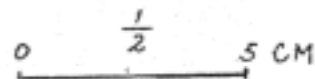
鐔 39



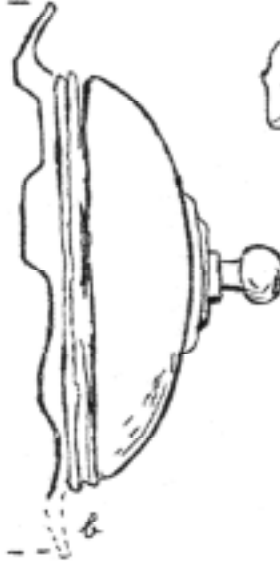
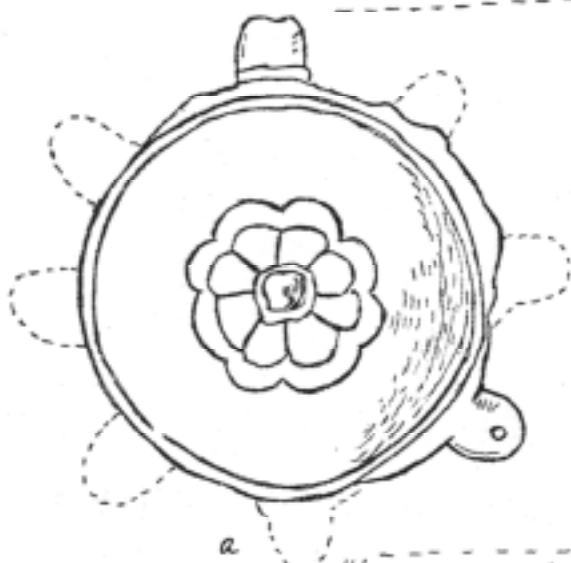
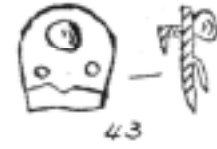
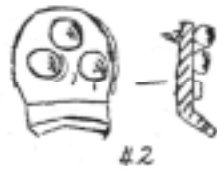
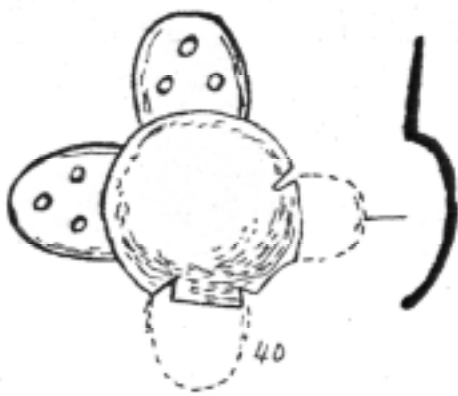
柄



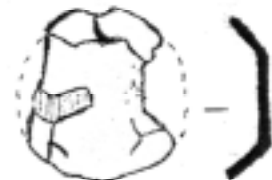
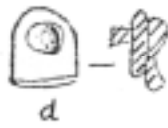
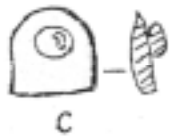
b



第九圖 刀 鐔

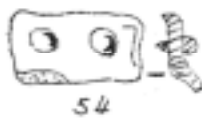


41 寶珠



56

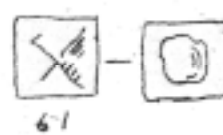
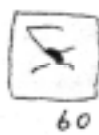
57



53

54

55



58

59

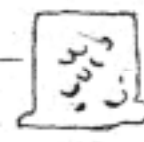
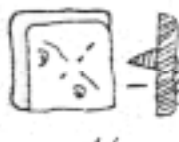
60

61

62

63

64



65

66

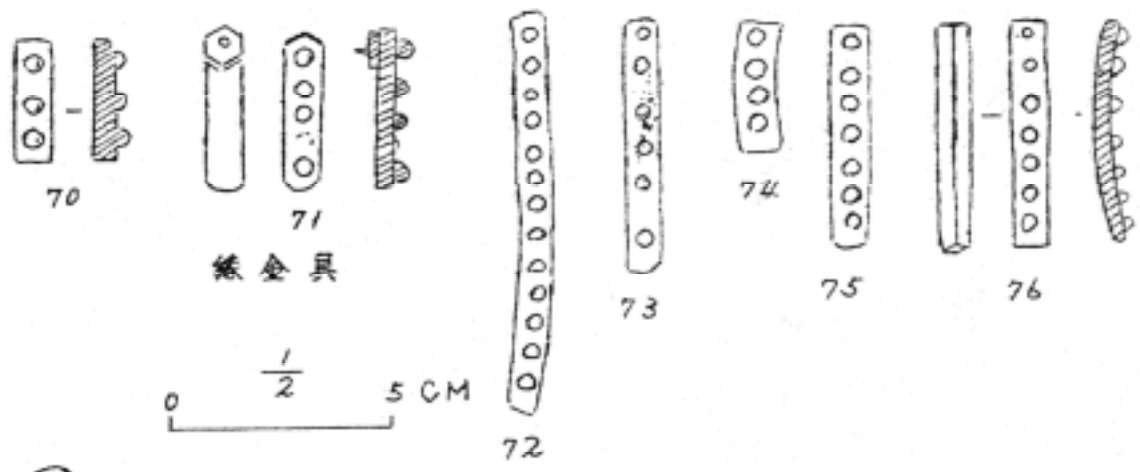
67

68

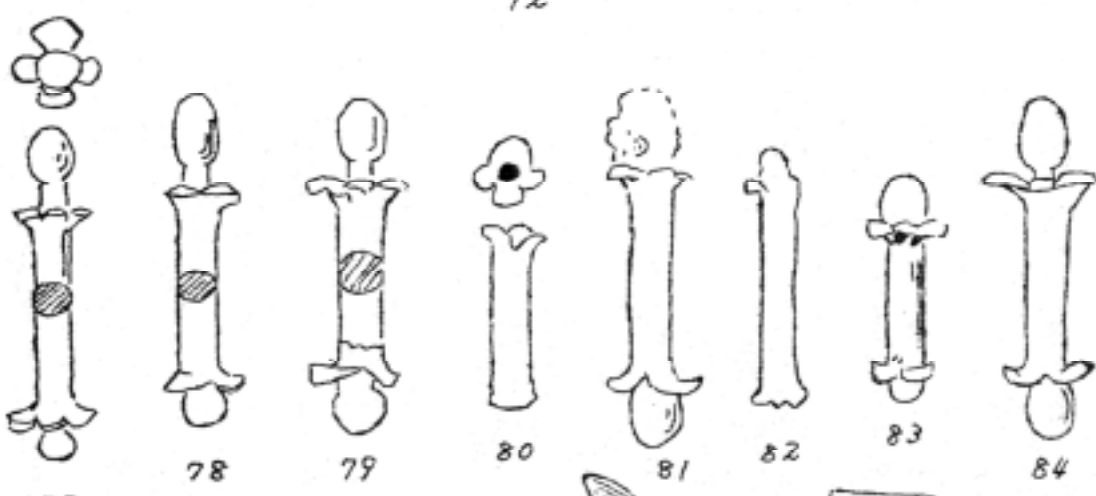
69

0 $\frac{1}{2}$ 5 CM

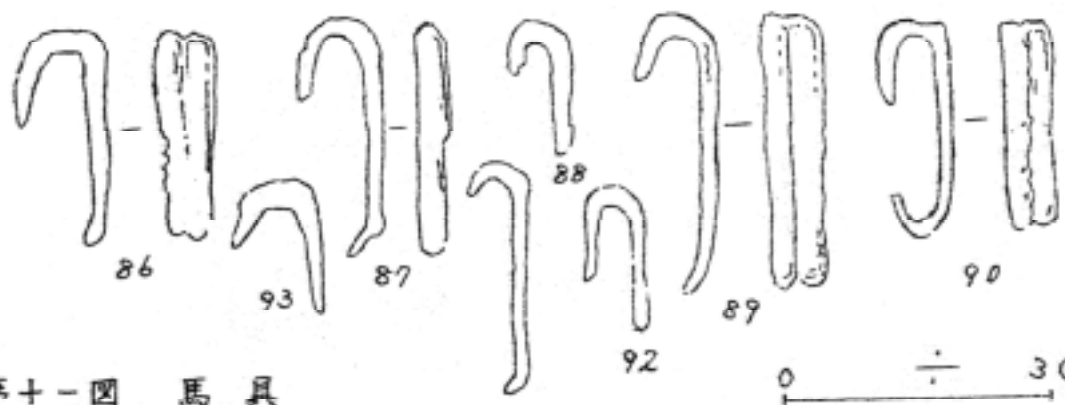
第十四 馬具



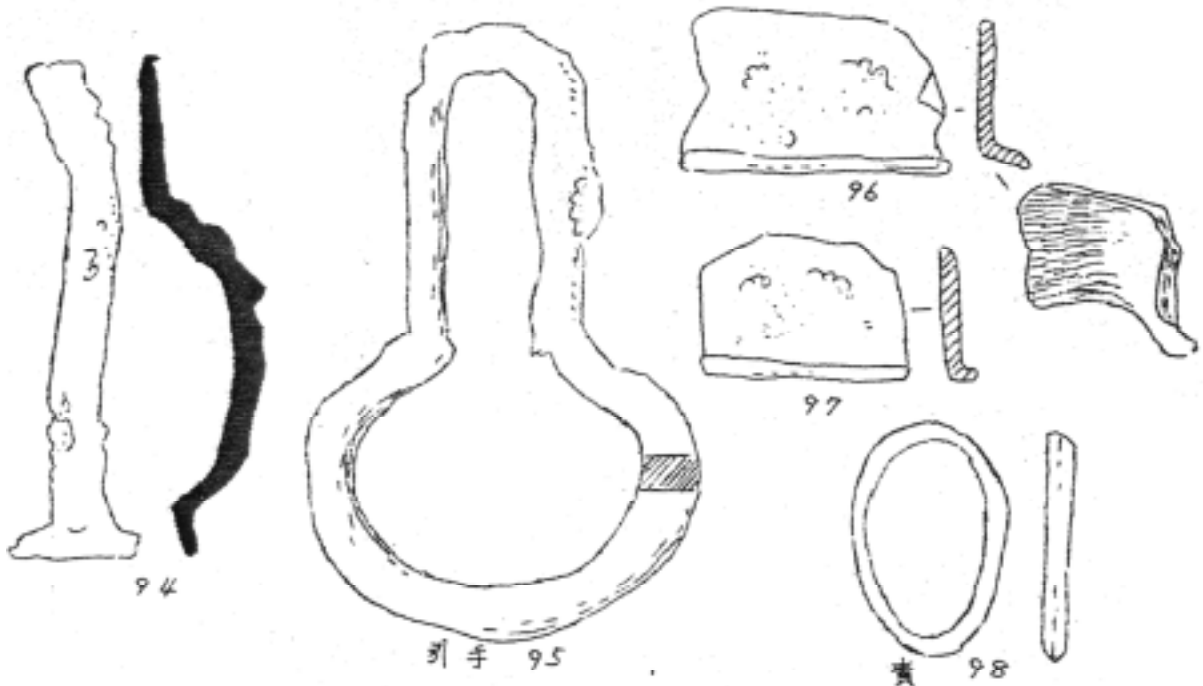
鐵金具



貝殼製珠 85

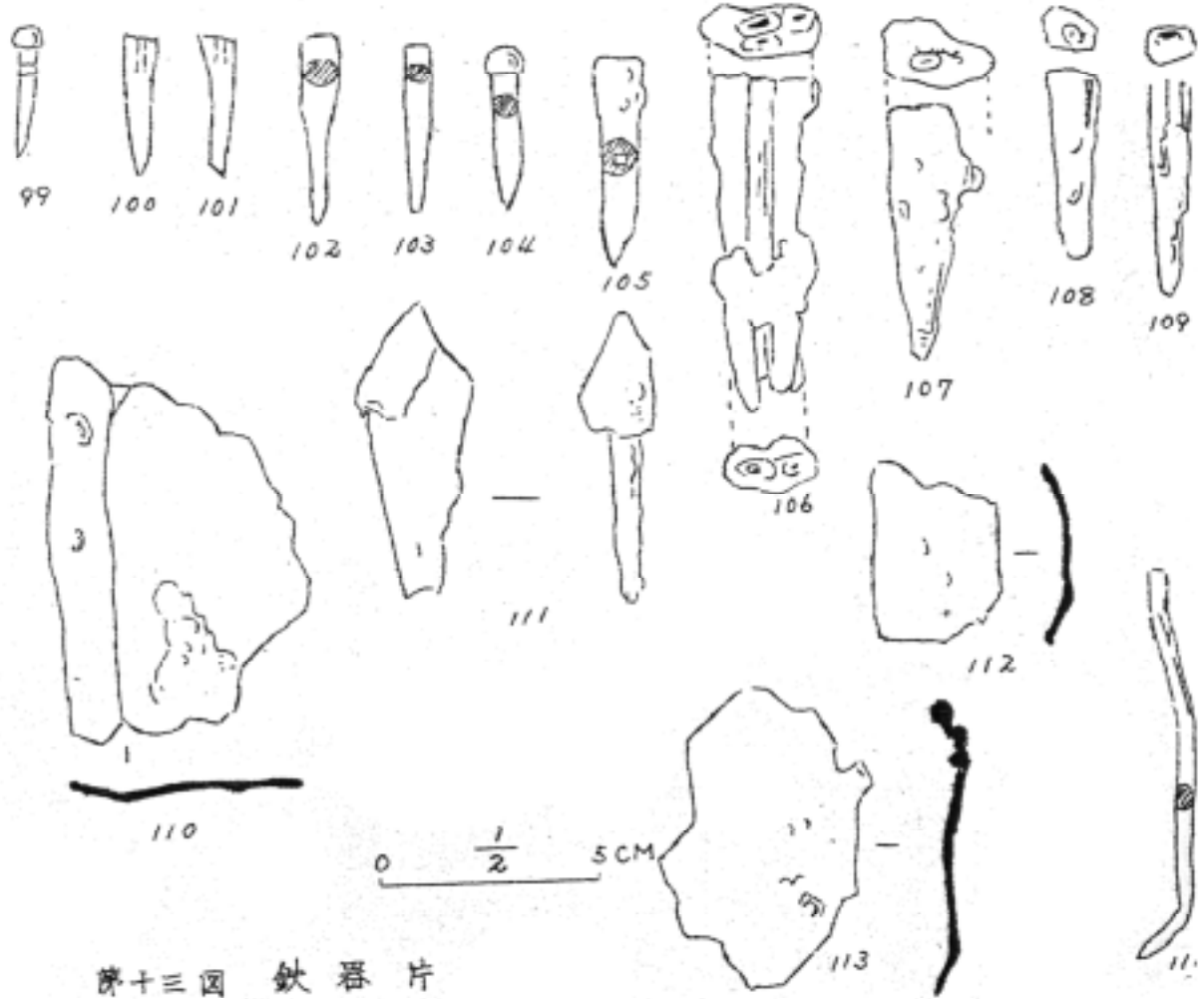


第十一圖 馬具



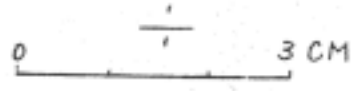
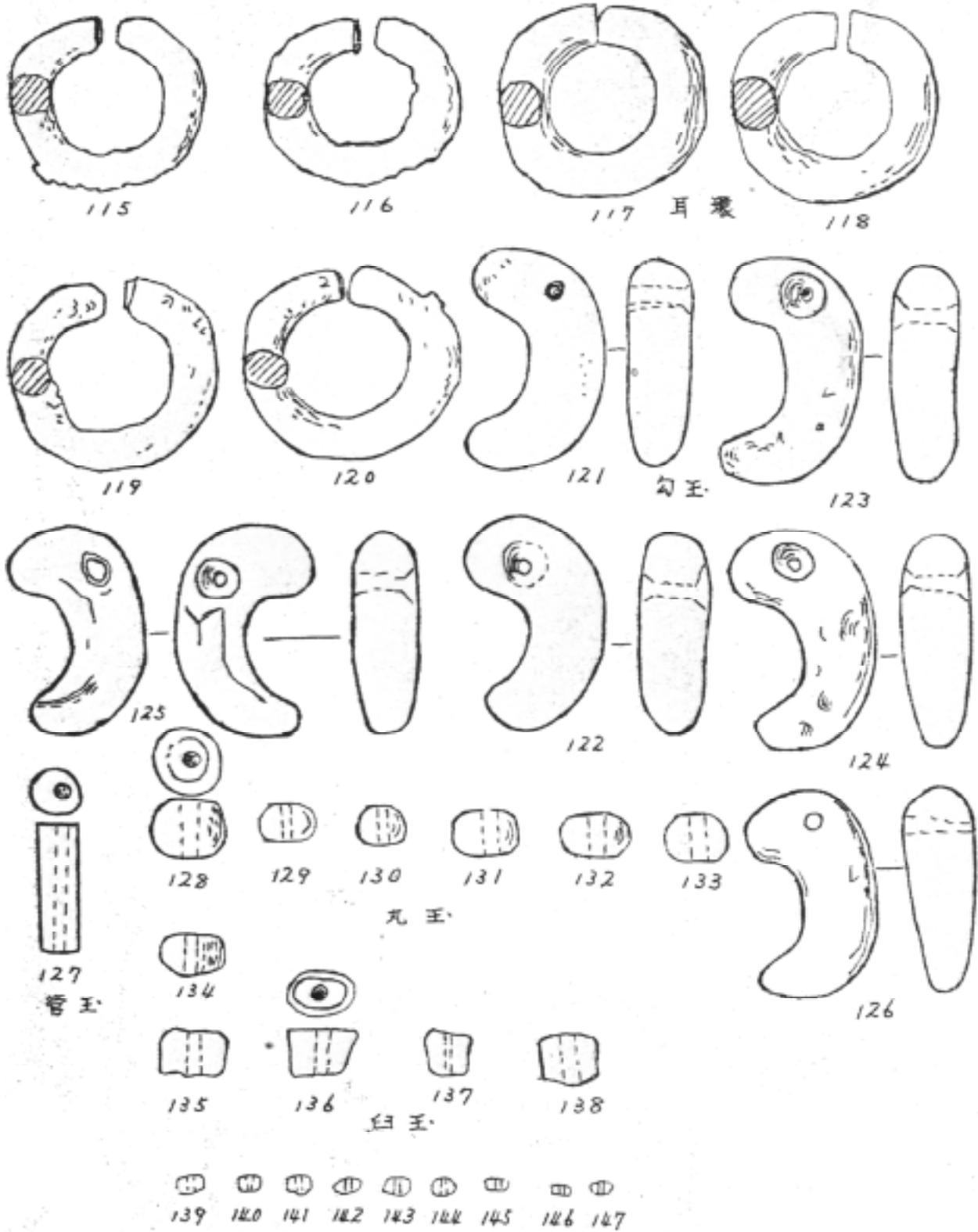
第十二圖 馬具

0 $\frac{1}{2}$ 3 CM



第十三圖 鉄器片

0 $\frac{1}{2}$ 5 CM



第十四圖 裝身具



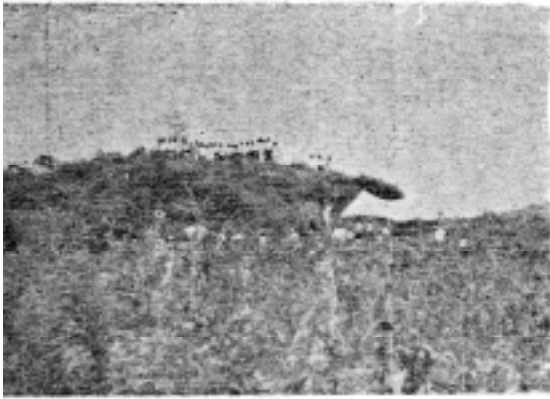
← 北

古墳石室内部東壁

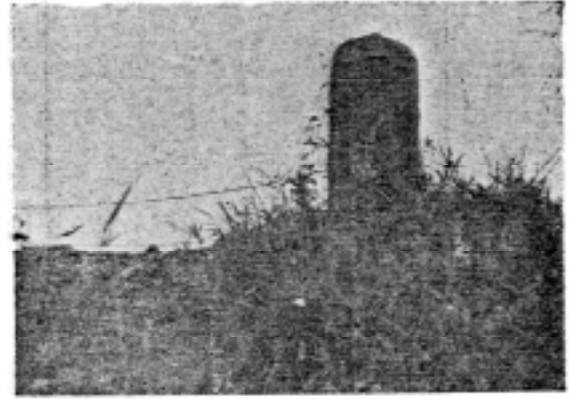


古墳石室内部西壁

→ 北



菟掘古墳全景



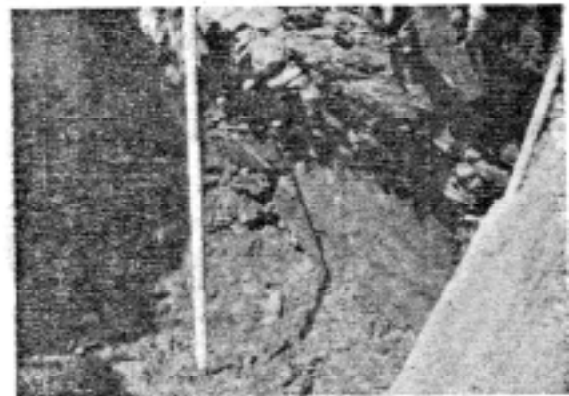
古墳頂上に竝立された庚申塚



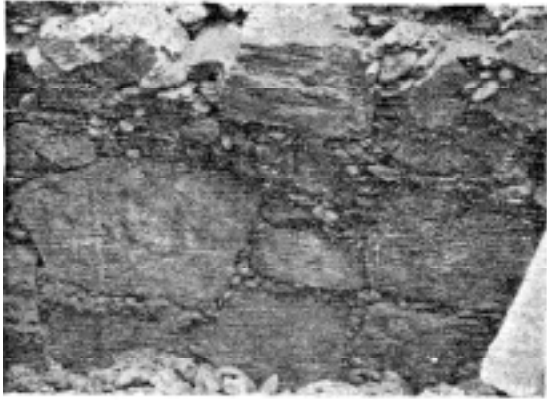
長さ5m 幅1.50m 高さ1.500もある
石室蓋石



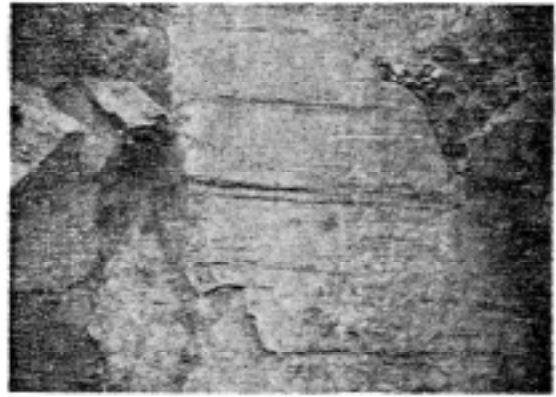
羨道入口の大石(石室内より写す)



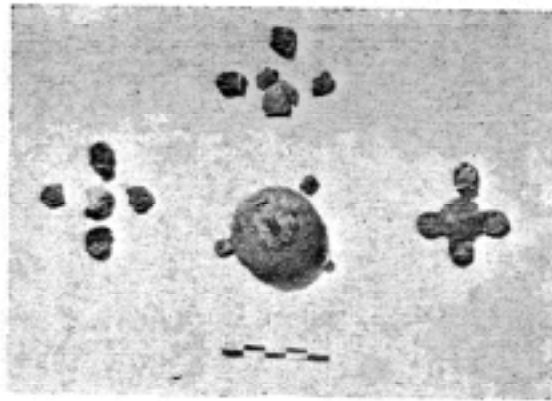
かまぼこ型に積まれた石室壁石には
さらに粘土にて押えてある。



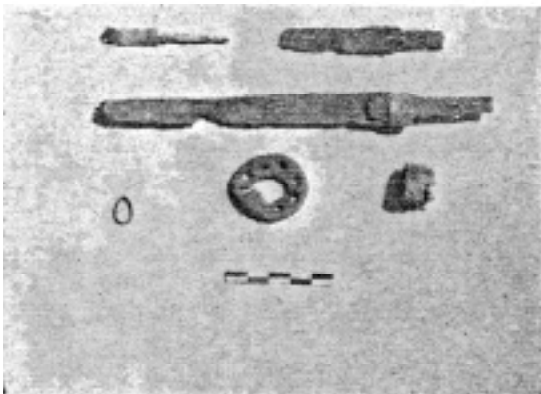
整然と積み上げられた壁石



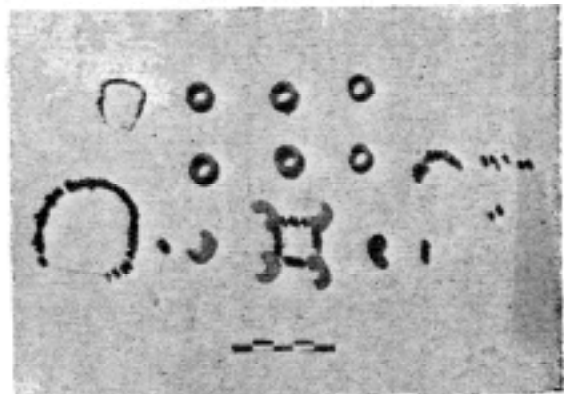
北壁に使用してある大石、高さ230cm幅20cm
厚さ15cmである



出土された壘球(うす)馬具裝飾



出土された刀子、つばなど



発掘された出土品のうち最も良き資料と
なった句玉(ひすい、めのう)管玉、丸玉耳環など

